

大学時報

UNIVERSITY CURRENT REVIEW

No.368

2016

5

隔月刊



東日本大震災の仮設住宅で暮らす被災者を対象に栄養教育をする学生（仙台北百合女子大学）

特集 高等教育は持続可能なのか

座談会 「入試改革」のこれまでと、これから

小特集 教職員の心の健康

わが大学史の一場面 阪南大学

加盟校の幸福度ランキングアップ 日本大学／西南学院大学／昭和女子大学

クローズアップ・インタビュー

シャボン玉石けん株式会社 代表取締役社長 森田 隼人さん

日本私立大学連盟



新入生研修後、仲間とともに





仙台白百合女子大学

仙台白百合女子大学は、
前身の仙台白百合短期大学創立から
50周年を迎えました。



「仙台白百合短期大学」



モンテッソーリ教育などに代表される幼児教育からパリ大学など欧州の大学の歴史に重なる高等教育まで、海外では「カトリック教育」に対して高い評価があります。日本では上智大学、南山大学など著名なカトリック大学があり、本学は東北地方で唯一の4年制カトリック大学です。

同じ設立母体による全国の「白百合学園」の精神、また前述のカトリック教育の精神は、歴史によって実証済みといえるかもしれません。グローバル化した現代においても、かつて函館を目指してはるかフランスから来航し、人生を終えた修道女たちの精神が、創立50周年を迎えた仙台白百合女子大学の「白百合の教育」の中に生きています。



仙台白百合女子大学

人間発達学科



造形ゼミナールによるエプロンシアター製作（保育教材研究）



仙台白百合学園小学校での1日観察実習

人間発達学科には、子ども発達専攻の中に幼稚園教諭・保育士養成課程と小学校教諭養成課程があります。どちらの課程の学生も、授業外のボランティア活動に積極的に参加して地域に貢献しています。小学校教諭養成課程の学生は、地域の小学校におけるボランティア活動が評価され、仙台市教育委員会から表彰されました。幼稚園教諭・保育士養成課程は、模擬保育や教材製作・音楽発表会など実践的な訓練の機会が多くあります。

心理福祉学科



生活支援技術実習



社会福祉法人・仙台白百合会「カリタスの丘」

心理福祉学科は、心理学を総合的に学ぶ心理コースと、社会福祉の実践領域を中心にソーシャルワークを深く学ぶ福祉コースによって構成されています。学内の設備の整った実習室だけではなく、仙台白百合女子大学の関連施設「カリタスの丘」も、研究・教育に活用されています。社会福祉法人・仙台白百合会「カリタスの丘」は2004年に設立され、周辺のみならず仙台市の高齢者福祉複合施設として高い評価を得ています。

健康栄養学科



実験授業風景



手作り弁当の調理

健康栄養学科は、人の健康に寄り添い、豊かな暮らしの支えとなるよう、求める人全てに的確に対応する前向きな姿勢を忘れない管理栄養士の養成に努めています。

ゼミ活動の一環として、2012年から年に5・6回、地元的女子サッカーチーム・ベガルタ仙台レディースの選手に手作り弁当を差し入れる活動を行っています。体力の消耗など身体的課題を念頭に、運動選手の食事を研究して実践する良い機会になっています。

グローバル・スタディーズ学科



中国や台湾からの留学生



セント・ポール大学マニラ校からスタディーツアーとして来学

グローバル・スタディーズ学科では、グローバル社会を理解するための教養と、そこで活躍するための実行力を身に付けることを目指しています。海外留学が盛んで、8カ国16大学と協定を結び、これまでに75名の学生を留学提携校に送り出し、24名の交換留学生を受け入れてきました。フロリダ州ディズニーワールドへのインターンシップ留学やANAエアラインスクールの学内講座など、東北地方では他にないプログラムを展開しています。

大震災ボランティア ——被災地のカトリック大学として



本学学生、教職員による被災地でのボランティア活動

2011年3月11日の震災当初から、仙台白百合女子大学は全国のカトリック大学、およびカトリック学校をはじめ、国内外の多くの方々からご支援をいただきました。また、本学の学生、教職員も被災地でさまざまなボランティア活動をしてきました。仮設住宅での栄養教育もその一つです（表紙）。

上の写真は、津波被害を受けた沿岸部でボランティア活動をする仙台白百合女子大学の学生有志と教職員です。現在の支援活動は、仮設住宅にお住まいの方々の生活支援や心のケアなどを、学生・教員のゼミや研究と関連して行っています。



清泉女子大学の協定大学 Leeds Trinity University College から大震災後に贈られたメッセージ。カトリック大学の全国的な絆、およびグローバルな絆を象徴する、本学の“宝”の一つです（写真左）。

大学時報

No.368

2016.5



巻頭言

牛渡 淳

● 仙台白百合女子大学学長

仙台白百合女子大学は学校法人白百合学園が経営している東北地方唯一のカトリック4年制大学であり、今年創立50周年を迎える。白百合学園の設立母体は17世紀のフランスに始まるシャルトル聖パウロ修道女会であり、現在は本部をローマに置き、全世界で教育福祉活動を展開している。本学は、キリスト教の愛の精神を土台にして、人間の深い理解と援助を目標に人間学部（4学科）を置き、豊かな人間性と確かな知性を持った、社会で活躍できる女性を育成している。

女子大学の地域社会における存在意義

川島 明子 ● 園田学園女子大学学長

はじめに

大学の「2018年問題」が大きな関心事となり、「淘汰の時代」が本格化するといわれている。さらに入学生の多様化やユニバーサル化、グローバル化の進展など、大学を取り巻く環境は激しく変化している。

三大都市圏にある女子大学も、大学の有り様の認識とあるべき姿の検討や自己改革が喫緊の課題である。本学も当然例外ではなく、厳しい環境下にある。

2013年に、本学は創立50周年を迎えた。その際、建学の精神や教育理念および「地域と共に歩む大学」としての地域貢献を再確認し、現在、建学の精神の具現化と実学教育の推進を中心とした教育改革を教職員一丸となって進めている途上である。

本稿は、開学の歴史を振り返り、小規模女子大学の取り組みを紹介し、その存在意義や直面している課題解決の方策についても言及することとしたい。

1 沿革

本学の前身は、1938年に設立された園田高等女学校である。当時の園田村（現尼崎市北東部）の村長をはじめ地域の有力者らは、戦時下にも関わらず、地域の女子教育の振興を図りたいという強い思いを抱き、「捨我精進」を建学の精神に設立を成し上げた。以来、この精神は本学の教育に脈々と受け継がれ、「地域と共に歩む大学」として70年以上を経た現在もなお継続している。さらに戦後の教育改革を経て、1963年に園田学園女子短期大学を開設し、1966年には文学部を設置した園田学園女子大学

として開設された。

その後、大学の教育理念を「他者と支え合う人間の育成」として確立。この間、時代の流れに呼応して学部編成の改革に取り組み、数次にわたる改組を行い、現在は人間健康学部（総合健康学科、人間看護学科、食物栄養学科）、人間教育学部（児童教育学科）の2学部と短期大学部（生活文化学科、幼児教育学科）で構成される、在籍数約2000名規模の女子大学である。さらに、1980年から、当時の国際化という社会の要請に沿う形で、オーストラリアやオセアニアの諸大学と交流事業を進め、1993年にはニュージーランドのクライストチャーチ教育大学（現カンタベリー大学）のキャンパス内に園田クライストチャーチキャンパス（SCC）を建設した。そして、これを足がかりとして、オーストラリア、インドネシア、台湾、中国、韓国の大学などの姉妹校提携や学術協定に基づく学生間の交換留学など、教育研究においても相互の交流を深めている。

学内においては、1979年から生涯学習講座を実施し、地域へのキャンパス開放、女性に限らない情報教育聴講生の受け入れ、近松研究所の附置など、

大学の持つリソースを地域社会に提供し、「地域と共に歩む大学」としての役割を果たしている。

2 経験値教育

少子化が進む中、本学にとつての試練の一つは共学化の問題であった。近隣でも多くの大学が男女共学に変わり、女子大学の存在意義が懸念された時であった。しかし、本学にとつては、代々の理事長や学長の、安心して、女性の持っている能力、感性を十分に発揮させることができるのは女子大学であるという熱い思いを継承し、女子大学として存続していく決意を固め、その存在意義を再確認する機会となった。近年は、小学校からのキャリア教育の浸透や共働きの増加、さらに女性活躍推進法の成立といった社会状況の後押しもあり、社会のキャリア観、世代観、家庭観なども大きく変化した。そのため女子大学は、女性に焦点を当て、「卒業後に迎えるライフステージごとの多くの課題をどう乗り越えるか」を学べるかけがえのない存在であるとの評価が定着しつつある感がある。健康、教育、生活など女子の実学教育を長年にわたり担っている本学としては、こ

れまで以上に女性が真に自立し、社会的に活躍するための教育を担う使命があると考えている。

そのための改革を進める中で、教育の手法として「経験値教育」を本学の方針に掲げている。「経験値教育」とは、自己の経験を客観化し、他者との比較によって相対化した上で、その蓄積を成長の糧とする教育である。学生には講義、および講義を基盤とした学内、学外での実習や実験などで学んだ知識が、地域社会で具体的な経験を重ねることによって、学生自身に「やる気」が起こり、社会で活躍するための原動力となる知恵に変わっていくという学びだと説明している。しかし、この「やる気」はいつ起こるかわからない。その時を見逃さぬよう、教職員には日常的に学生とは近い距離感を持って接し、教育することを求めている。

「経験値教育」は学生がライフステージごとの課題を乗り越え、自信を持って自己実現を果たすための適切な教育手法であると考えている。

3 課題解決の方策

ここ数年の間に、大学は国の内外における政治、

経済、社会、文化、その他多方面の大きな構造的変化を経験してきた。大学教育のモラトリアム的な姿勢の一部が、大学に関わるさまざまなステークホルダーから怠慢と指摘され、エビデンスのある学士課程の質の保証の構築が大きな課題となっている。さらに、これまで実社会で十分に活用されてこなかった女性の力を最大限に引き出すための法的制度整備が進み、経済も家事も男女が分担する新たな時代を迎えた。女性が真に社会から期待され、信頼されるためには専門分野に関する知識や技能を高めることはもちろんだが、広い視野を持ち、たとえ時代が進み社会が求めるものが発展し高度化しても、しなやかにそしてストレスに耐えられる強い人間力が必要であり、その育成も課題として大学に求められている。これらの課題解決のために、本学は「経験値教育」の具現化の仕組みづくりとその実践の場の構築を検討してきた。

2013年度、「地域と共に歩む大学」として、地域の拠点の役割を果たしてきた実績をふまえ、文部科学省の「地〈知〉の拠点整備事業」に申請し、「地域」と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラム」に

選定・採択された。

本事業は実践の場を兵庫県尼崎市とし、学内に地域連携推進機構を設置して種々の取り組みを推進している。現在、尼崎市などと本学が連携する地域志向基礎科目「大学の社会貢献」を開講し、2016年度には、2年次生を対象に全学を横断する地域志向必修科目「つながりプロジェクト」を新設する。

これらの科目は、尼崎市の地域課題に即したテーマとして行政などと共に取り組み、課題解決に向けた企画、提言を行うことを目的としている。同時に、この循環型の「経験値教育」を実質的なものとするために、本事業では経験値評価として3つの評価（アセスメント、プロジェクト評価、つながり評価）からなる新しい評価システムを導入し、学びを具現化し実感できる指標を策定している。本事業は、学生が地域での学びを通して失敗と成功を繰り返し経験し、その成果として主体的にイノベーションして、強い人間力を備え、社会に貢献できる女性を育てる仕組みである。

今後、教職員は学生が卒業した後も活躍を支援し、見守っていく責任があることを肝に銘じておきたい。

おわりに

以上、本学の教育改革の実践例と課題解決の方策について述べてきた。本学は建学の精神や大学の理念に基づき、教育に軸足を置いた大学である。さらに、今後も女子大学として社会に存在し、その存在意義を示し続けるには身の丈に合った改革の歩みを進めていくことが不可欠である。しかし、教育の現場は短期的な方針や社会の動向に唐突に左右されるはならない。あくまでも教職員が理解し、協働して支援し、学生に浸透し、学生の教育を活性化させる改革でなければならない。今後も、学内での不断の意見交換はもとより、現場からの改革策とエビデンスに基づく企画を中心に社会のニーズも加味しながら、主体性のある大学運営を地道に実行していくつもりである。

もちろん、研究や地域貢献は魅力ある教育を創造するために欠かすことのできないものであり、教職員、学生にとって、風通しの良い生気にあふれた教育、研究、地域貢献の場でありたいと願っている。